

編集後記

2009年11月に本協会60年史が出版されてから早いもので10年が経過した。本書は本協会の70周年記念事業の一環として、ここ10年間の活動を中心にまとめたもので、各部会・委員会の活動、要員認証・認定事業活動などを記録すると共に、将来への展開を探る布石とすべく、普及・啓発活動や他学協会との共同活動の状況を記している。

この10年間の溶接界の変化は著しく、環境面では

- ・グローバル化の大渦：生産拠点の海外シフトの見直し、労働集約型のビジネスからの転換（付加価値創造生産への移行）
- ・溶接人材の減少：研究者・技術者の人口減少、人材ピラミッドの高齢化シフト、外国人技術者の受入対応

技術面での大きな変化は、

- ・つなぐ技術から造形技術へ：3次元積層技術の急速成長
- ・溶接界のIoT：Connected Industriesで求められる溶接技術への展開

こうした中、2012年3月に溶接会館が完成し、（一社）溶接学会と（一社）軽金属溶接協会が入居することによって国内溶接主要3団体が集結し、我が国の溶接分野の社会的課題に対応する「溶接総合センター」として活動を開始した。溶接会館は、100名規模の集会のできるホールを擁し、溶接人材育成を視野に入れた研修機能を備えている。また、溶接情報センターが大幅に拡充され、各種溶接情報がアーカイブ化（溶接学会との連携コンテンツも含む）されて現在では約8,000件/日のアクセス数となっている。

さらに、2018年10月には、（公財）溶接接合工学振興会が入居し、公益財団法人としての特徴を活かした連携により、溶接界の将来発展に向けた教育活動助成などの新事業ができる環境が整った。

このように、本協会の活動基盤は10年前と比較すると飛躍的に強化され、溶接会館が我が国の溶接界の「社会拠点」といえる風格を備えつつある。本協会に求められる役割はますます大きくなり、上記の課題解決へのトップランナーとしてのミッションを掲げた活動展開が期待される。社会に役立つ協会、使える情報を具備した協会であることが益々要望され、10年後を見越した活動ビジョン策定はもとより、さらに30年後の100周年を見通した戦略ロードマップの準備を始めてもよいのではと思うのが、編集後記としての感想である。（南）